

一団の団長格の人が答えた。

「加賀の国から来て相馬に行きます。」

「通行券を出せ。」

「ありません。」

「無礼者、ここを何と心得ている。天下に名高い勿来の関。通すことはまかりならん。とつとと国に帰れ。」

「何とぞごれんびんを。」

「ならんといったらならん。」

一団は困り果ててしまった。今更帰れといわれても帰れない。みんなうなだれて一言もない。役人はかわいそうに思ったのか小さな声で、

「だがな、ふらちなものは海岸を通る。」

にわかにもとの声にもどって、

「しかし、貴様らはならんぞ。おとなしく国に帰れ。」

「ハイ、かしまりました。」

誰も無言であった。しかし、みんなの顔は晴々としていた。